

生存科学研究ニュース

VOL.21. No.3 2006.11 発行

発行 財団法人 生存科学研究所

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1

電話 03-3563-3518 FAX 03-3567-3608

Eメール seizon@mx1.alpha-web.ne.jp

会員・ひと・ネットワーク



今回は生存科学研究所の研究推進の要である大塚正徳副理事長にお話を伺いました。生存科学研究所に入会された経緯について

私の恩師である故熊谷洋先生（東京大学名誉教授）が生存科学研究所の理事長、江橋節郎先生（東京大学名誉教授・岡崎国立共同研究機構生理学研究所名誉教授）が同評議員をしておられ、友人の中山昌作先生（生存科学研究所前常務理事）に入会を勧められたのがきっかけでした。

中長期基本構想委員会責任者として来年度の新規研究に対する抱負は？

個人的には脳、教育、子供の脳発達、犯罪心理などに興味を持っています。平成19年度の新規研究は以下の2点について、推進してゆきたいと思います。

① 川崎病について：日本で発見された川崎病の病因究明に当研究所が貢献し、年間1万人の患者発生を根絶することを期待しています。

② 医療崩壊について：具体的データを調査提示し、それに基づく政策立案を提言できるような活動を立ち上げたいと願っております。

生存科学研究所に期待すること

たとえ小さくても、確実に「生存科学研究所の目的」に役立つような活動を組織してゆきたいですし、若い研究者の活動を支援してゆきたいと考えています。

第7回口腔環境研究会



2006年6月27日、生存科学研究所において、Tokyo Beauty Center (TBC) 役員室部長の手塚圭子先生より、エステティック業界の現状と将来展望についてご講演いただいた。

現在、日本のエステティックサロンで行われているケアはほぼ全身に及び、まさに多種多様である。こうしたケアは、医療的な手術や治療ではなく、日常的に女性が行うような身体のケアを施すことである。したがってエステシアンが用いるのは、医薬品ではなく化粧品であり、病気を治すことではない。しかしエステシヤンの役割とは、美容という切り口でリラクゼーションを与え、体調改善や精神的ストレスの解消を図り、心身のアンチエイジングの実践であることを、手塚先生はサロンでの驚くような実例を示しながら、印象深く強調された。

一方、エステティックの発祥の地であるフランスでは、国家資格のソシオ・エステシアンと、その養成機関(CODES)が存在し、社会的・制度的に広く認知されている。その活動は、病院や老人ホームなどの医療機関において、「出張ネイルサロン」を開くようなものである。そこでは、医師や看護師の治療ではなく、女性としての何気ないおしゃれを楽しむ。同時に、その瞬間は病気を忘れてソシオ・エステシアンとの会話を楽しみ、社会との接点を再認識する、まさに「心身のケア」をおこなっている。くわえて、このシステムを支える基金が存在し、CODESの活動と利用者の経済的負担をサポートしている。

日本における本業界の現状は、玉石混交で商業主義が先行する感があるのは否めない。こうしたバラバラで無秩序な業態ではなく、業界として

統一した認証制度を確立するために、手塚先生は経産省や厚労省と折衝を重ね、その実現に日々専心されている。今後の手塚先生のご活躍により、一日も早い「日本版」ソシオ・エステティシャン制度の確立を祈念したい。

(中原 貴)

第6回「代替医療と倫理」研究会



表記研究会は、「『医療化』の言説をめぐって - 代替医療は医療社会学の挑戦にどう応えるか - 」と題し、2006年4月20日(木)18:00から、鍼灸ジャーナリスト・鍼灸師の松田博公氏に

よる発表と議論が行われた。

題名の契機は、松田氏が、医療社会学者であり臨床医でもある佐藤純一氏によって定式化された「医療化における代替医療の位置づけ」に医療社会学からの挑戦を感じたことに始まる。発表では、それを批判的に分析した後、身体感を軸とする自説を述べた。すなわち、佐藤氏の医療化論に現れる「代替医療が医療化に加担している」というテーゼをとりあげ、その論理構成のすき間を崩した後、医療化の罟から抜け出る活路を代替医療の理論とわざの中に見出すという自身の考え方を述べた。

医療化とは、心身二元・要素還元にもとづく近代医療を通じて、人間の生命そのものが権力によって無意識的に管理されていくことを指す。代替医療は、心身一如と全体論を基礎に置いているので、近代医療からみれば異端であるが、異端であるがゆえに多元的システムを可能にし、医療化を緩和するものとして捉えられてきた。

しかし、佐藤氏によると、代替医療は近代医療を補完しているので、むしろ医療化を一層推進するという。代替医療は患者の欲求不満を近代システムの中に再回収し、より大きな単一的システムを作ってしまうからである。このテーゼによると、代替医療は、医療化への対抗装置であるという位置づけではなく、近代システムへの「呼び水(おとり)」となる。代替医療は、健康ブームをまきおこし、健康言説を規格化していくことで、実際には近代医療の延命を支えていることになる。

これに対して、松田氏はまず、佐藤テーゼは抽象的な議論の組み立てであり、近代医療と代替医療における矛盾対立する諸系のせめぎ合

いを力動的に観察する視点が欠けていると反論する。さらに、脱中心的な健康自律の動き、自己のテクノロジー(養生)、身体の多重的な可能性といった要素を挙げながら、医療化から脱しうる代替医療像を説明する。代替医療の理論は、インスタント治療と対立する時間感覚論、癒しの超越論を含み、代替医療のわざは、個別的关系を切り開くという見方である。そしてそこからの示唆として、われわれすべてにおいて心と体の状態を感知できる新たな身体感を取り戻すことが重要であると締めくくった。

討論ではまず、身体感の陶冶という一定の行為を勧めることも、「医療化」の一種として「医療化」に取り込まれてしまうのではないかと質問が出された。しかし、代替医療がかえって医療化を促進させるというテーゼは代替医療の社会的な側面に囚われており、松田説の身体感はむしろ個別側面に光を照らすことで医療化に吸い込まれない路線を確保しているという意見も出され、代替医療の潜在的な多面性を今後どう社会に誤解なく認識してもらうかについて、議論は発展していった。つぎに、医療社会学のテーゼは理論的にシャープすぎて社会の実態を説明しきれておらず、挑戦として受け止める必要はないのではという意見が出された。それに対しては、近年みられる医療費抑制を狙った国による健康観の押し付けや健康法の規格化の問題、メディアが新たな「病名」を作り出し、販売業者がその改善手段を提供している問題等々が、矢継ぎ早に指摘された。最後に、「病名」を与えられるまで安心できずにドクターショッピングを続ける患者側の問題や、診療で用いられる統計的数値の妥当性の問題にまで議論は及んだ。

(長澤道行, 津谷喜一郎)

第7回「代替医療と倫理」研究会



表記研究会は「生命への暗黙の決断 - 日本における『生命倫理』と代替医療に向かう死生観を求めて - 」と題し、2006年6月15日(木)18:00から、京都市芸繊維大学大学院生命倫理学研究室教授・大林雅之氏による発表と討論が行われた。

大林氏は、「欧米に比べ、日本における生命倫理の語られ方はあいまいで、はっきりしない。日本的な医療観、生命観が関わっているのか」と前置きしながら、日本での先端医療と生命倫

理との関係を示す最近の動向についてコメントした。(1) 臓器移植。現在、15歳未満(あるいは15歳以上であっても)脳死状態になったとき、本人の意思表示がなくても家族の同意のみで臓器提供できるように臓器移植法を改正する動きがある。本人の意思をナショナルコンセンサスにスタートしながら本人の意思がない場合にも提供できるようにするのは大変な改正だという認識は薄いのではないか。(2) 出生前診断。日本では議論もある中でずるずると実施されているが、検査の結果、障害が見つかる多くの人が中絶する。障害と中絶を結びつけることが暗黙の社会的了解になっている。うやむやの形だが、日本全体として見ると、「ある倫理」が働いているようにも思える。(3) 生殖技術。日本では、法的コントロールがないまま代理出産などの技術が先行し、人工授精の実施から考えれば何十年もやっている。(4) ヒトクローン胚。日本はいち早くクローン技術規制法を作ったが、なぜクローン人間を作ってはいけないか、根拠を明確にしていない。そして、2004年、研究のためにはクローン胚を作るのを認める方針を出した。(5) ES細胞。不妊治療の一環としてできた余剰胚を使うのは認めた。研究推進しかたがない、一番問題が少ない、という了解。余剰胚を使うのは「生命の萌芽」に抵触しないとは言えない、中絶と同じではないか、という疑問について議論されない。欧米ではとにかく議論をして合理化を図っているが、議論しないのが、日本のやり方なのだろうか。

欧米の「パーソン論」は、人間として尊重されるべき対象は、自己意識を持った存在であるとして、自己責任を取れる可能性のない存在との間に、生命の区分けをしている。日本では、「内なる優生思想」で、皆が思っているが表面に出さないで、大事な社会的決定を行っている。それが日本的なあり方なのか。大林氏は、そのような行動形態の典型的な姿を、深沢七郎の小説『楢山節考』から読み取る。そこでは、盗みをした一家を村人が総出で生き埋めにし、家も壊して更地にして帰り、何事もなかったかのように生活を続ける。暗黙の了解の中で、隠蔽し、隠蔽することで共有化を果たして生きる人々が描かれている。

先端医療技術に対しても、きちんと議論せよという指摘が空回りするような構造が日本社会にはあるのではないか。それを、「生命への暗黙の決断」と大林氏は名付ける。みんな分かっているけれど、表に出して議論すると違った

ものになってしまうから、しないで承認する。クリティカルなことであればあるだけ、言語化しないで決めていく。

このような分析から、現在、大林氏は、日本における生命倫理の語り方とは何かという問題意識を抱いているという。医療は法的に対処できるものなのか、ALSの患者の人工呼吸器を外すという問題、性や身体の語り方について、従来とは異なる考え方があり得るかも知れない。代替医療にしても、西洋医学との対比においてでなく、それ自体でひとつの医療として語るべきではないか。生命倫理を、法的に明確にするという以外の、別の語り方を模索しなければならないのではないかと、言う。

討論では、がんを一方向的に告知するのではなく、医師と患者の間で自然に伝わる関係が作られなければならないというエッセイスト、徳永進医師の発言が紹介され、それらを手がかりに、インフォームドコンセントは過渡的なもので理想ではない、本来、医療とは、倫理的な価値観、生活スタイルを共有するコミュニティ内で可能となる行為ではないか、という議論に発展した。そのほか、あらかじめ行政サイドが作ったストーリーのまま結論が用意される現在の審議会方式で生命倫理が語られることの問題、なぜヒトだけを他の動物から切り離して生命倫理を語るのか、という疑問など多岐にわたって話題が展開した。

(松田博公、津谷喜一郎)



シンポジウムのお知らせ

平成18年12月18日(月)「心・脳と教育」研究会では下記の通りシンポジウムを開催いたします。奮ってご参加ください。詳細につきましては生存科学研究所ホームページに掲載いたします。

(<http://w1.alpha-web.ne.jp/~seizon/>)

会場：国際文化会館(東京麻布)

時間：10:00~17:45

テーマ：意欲・運動・睡眠の発達過程と相互連関—幼児期のロコモーションに関する新たな視点—

プログラム：

開会のご挨拶と趣旨説明

日立製作所フェロー・東京大学客員教授

小泉英明

幼児期の神経発達

慶応義塾大学医学部教授 高橋孝雄

ロコモーションの発達

生理学研究所名誉教授 森 茂美

クロノエデュケーション(英語)

ローマ教皇庁科学アカデミー

アントニオ・バトロー

睡眠とロコモーション

瀬川小児神経クリニック院長 瀬川昌也

幼児にみる「はいはい」と脳の発達

さくら・さくらんぼ保育研究所所長 斉藤公子

平成19年度研究助成者募集要項

財団法人 生存科学研究所では1999年以来日本川崎病研究センターとの共同事業を推進してきました。現在、川崎病の治療はかなり確立しておりますが、病因は全く不明です。かつて SMON (Subacute Myelo-Optico Neuropathy) が病因解明に伴い根絶したように、川崎富作博士によって1967年に発見された川崎病も日本人の手によりぜひ病因を解明し、毎年1万人前後にのぼる新たな患者発生を根絶したいと願っております。そのため、本研究所では病因解明のための若手の研究者による野心的研究に助成をしたいと考えております。詳細および申請書は本研究所のホームページからダウンロードできます。奮ってご応募ください。

(<http://w1.alpha-web.ne.jp/~seizon/>)

研究会日報

- 5月9日 (火) 口腔環境研究会
- 5月12日 (金) UKにおける医療・福祉の連携に関する研究会
- 5月20日 (土) 現在の保健医療制度の源流を探る研究会
- 6月15日 (金) 英国における医療・福祉の連携に関する研究会
- 6月27日 (火) 口腔環境研究会
- 7月11日 (火) 老年期における安全保障研究会
- 7月24日 (月) 三役会
- 8月26日 (土) 現在の保健医療制度の源流を探る研究会
- 9月7日 (木) 第1回常務理事会
- 9月12日 (火) 口腔環境研究会
- 9月15日 (金) 脳・身体の日内リズムに基づいた教育・学習研究会
- 10月5日 (木) 代替医療と倫理研究会
- 10月7日 (土) 現在の保健医療制度の源流を探る研究会
- 10月19日 (木) 第2回常務理事会
- 10月20日 (金) 川崎病研究会
- 10月24日 (火) 口腔環境研究会
- 10月28日 (土) 老年期における安全保障研究会

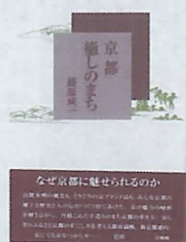
寄贈図書

題名：京都 癒しのまち

著者：藤原 成一

出版社：法蔵館

定価：1800円(税別)



題名：戒名のはなし

著者：藤井 正雄

出版社：吉川弘文館

定価：1700円(税別)

